葛雜載

べし、晒場ハ家の外に、屋根ばかりの小屋を建て晒べし、扨初め起したる葛の下面の方、壹分ばかりも土氣まじれば、是を削てとり置たる分は、又水を入搔交て暫見合、上の白水を別の半切に靜にすため取、底に殘りたる砂ハ捨べし、白水の分も水を仕替て、跡より仕込分に入込て用ふべし、凡晒揚たる葛粉、壹斗にて四五合のわりには減ずるなり、

曝には寒中を最上とす、然れども九月より翌三月迄は宜し、水暖になりては惡し、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥

山城國卅二種、〇中略葛根卅二斤、　伊勢國五十種、〇中略葛根十斤、　安房國十八種、〇中略葛花旋覆花各一斤、〇下略

〔寛政四年武鑑〕水戸少將治保卿　時獻上暑中葛粉

松平越後守康致〇美作津山　時獻上十月葛粉

細川與松立之〇肥後宇土　時獻上暑中葛粉

〔日本書紀三神武〕己未年二月、高尾張邑、有土蜘蛛、其爲人也身短而手足長、與侏儒相類、皇軍結葛網而掩襲殺之、因改號其邑曰葛城、

〔播磨風土記宍禾郡〕御方里、土上下所以號御形者、葦原志許乎命與天日槍命、到故墨志爾嵩、各以黑葛三條、著足投之、爾時葦原志許乎命之黑葛一條、落但馬氣多郡、一條落夜夫郡、一條落此村、故曰三條、天日槍命之黑葛、皆落於但馬國、故占但馬伊都志地而居之、

〔出雲風土記意宇郡〕所以號意宇者、國引坐八束水臣津野命詔、〇中略童女胷鉏所取而、大魚之支太衝別而、波多須々支穗振別而、三自之綱打挂而、霜里葛聞々耶々爾、河船之毛々曾々呂々爾、國々來々引來縫國者、自去豆乃打絶而、八穗米支豆支乃御埼也、〇中略

凡諸山野所在草木、〇中略葛根、